



黒木玄 Gen Kuroki

@genkuroki

線形計画法における双対性の話をツイッターの
twitter.com/genkuroki/status/8... でしたが、行列の表記で難義しました。

大学新入生向けに線形代数を「体上の線形空間の理論(環上の加群の理論の特別な場合)」として教えようとする人はわかっていない人だと思う。

2017年05月03日 22:49 · Web · 0 · ★ 2 · Webで開く



黒木玄 Gen Kuroki @genkuroki

on May 3

そっちで紹介したのは

[Tucker1950] A.W.Tucker, Dual systems of homogeneous linear systems (1950)

にある次の定理。

定理(Tucker). G が n 次実交代行列のとき、ある列(縦)ベクトル $v \in \mathbb{R}^n$ が存在して、
 $v \geq 0, Gv \geq 0, v + Gv > 0$.
 を満たす。

ただし、 $\geq, >$ はそれぞれすべての成分で $\geq, >$ が成立することを意味するものとする。以下も同様。証明でアイデアが必要なのは $>$ の部分です。例えば、この手の話題では標準的なFarkasの補題経由で証明できます。



黒木玄 Gen Kuroki @genkuroki

on May 3

で、そのTuckerの定理を認めると、次のBroyden(1998)の定理を示せます。
scholar.google.co.jp/scholar?c...

Broydenに定理 : n 次直交行列 P に対して、あるベクトル $v \in \mathbb{R}^n$ で $v > 0$ と $|Pv| = D$ を満たすものが存在する。

ただし、 $v > 0$ は v のすべての成分が正であることを意味し、 $|Pv|$ は Pv の各々の成分をその絶対値で置き換えたものを意味します。

この結果は数学的に深くも何ともないのですが、知らなかったので、ツイッターの方で「数楽」として紹介しました。



黒木玄 Gen Kuroki @genkuroki

on May 3

Tuckerの定理 \Rightarrow Broydenの定理の証明の概略 : n 次直交行列 P から $3n$ 次実交代行列 G を

$$G = \begin{bmatrix} 0 & -(E - P^T) & -(E + P^T) \\ E - P & 0 & 0 \\ E + P & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

と定めて、Tuckerの定理を適用すると、あるベクトル v で

$$-v \leq Pv \leq v$$

を満たすものの存在を示せる。 P が直交行列であることより、ベクトル Pv の長さは v に等しいので、そのとき $|Pv| = v$ となる。q.e.d.

詳しくは別の記号で書いた

twitter.com/genkuroki/status/8...

の添付画像(このツイートにも転載)を参照して下さい。 mathtod.online/media/qzU_n9Ljg...

$$A = \begin{bmatrix} 0 & -(E-Q^T) & -(E+Q^T) \\ E-Q & 0 & 0 \\ E+Q & 0 & 0 \end{bmatrix}. \quad \leftarrow \begin{matrix} \text{これにスカラーを足しては} \\ \text{Tuckerの定理より、あとはルージン} \end{matrix}$$

Tuckerの定理より、ある $x, y, z \in \mathbb{R}^n$ が存在して、

$$\begin{matrix} \textcircled{2} \rightarrow \\ \textcircled{3} \rightarrow \end{matrix} \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} \geq 0, \quad A \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -(E-Q^T)y - (E+Q^T)z \\ x-Qx \\ x+Qx \end{bmatrix} \geq 0, \quad \textcircled{4} \rightarrow \begin{bmatrix} x - (E-Q^T)y - (E+Q^T)z \\ y + x - Qx \\ z + x + Qx \end{bmatrix} > 0.$$

$$\textcircled{1} \quad p := -(E-Q^T)y - (E+Q^T)z \geq 0 \text{ とおくと, } y+z+p = Q^T(y-z), \quad Q^T \text{ が直交行列であることより, } \|Q^T(y-z)\|^2 = \|y-z\|^2 \text{ なの}.$$

$$A = \begin{bmatrix} 0 & -(E-Q^T) & -(E+Q^T) \\ E-Q & 0 & 0 \\ E+Q & 0 & 0 \end{bmatrix}$$



黒木玄 Gen Kuroki @genkuroki

on May 3

Broydenの定理からTuckerの定理を出すこともできて、実交代行列からCayley変換で得られる直交行列にBroydenの定理を適用するだけです。

こういう話って表現論と何か関係あるんですかね? 私はよくわかりません。



黒木玄 Gen Kuroki @genkuroki

on May 3

交代行列に関するTuckerの定理はとても使いやすい形をしており、交代行列は対称ゲームを表現しているともみなせます。

線形計画法における双対性を出したければ、適当にブロック分割された交代行列にTuckerの定理を適用すればよいです。

例えば、交代行列

$$G = \begin{bmatrix} 0 & A & -c \\ -A^T & 0 & b \\ c^T & -b^T & 0 \end{bmatrix}$$

$(b \in \mathbb{R}^n, c \in \mathbb{R}^m)$ にTuckerの定理を適用すれば

$$(P) \min \{ \langle x, c \rangle \mid x \geq 0, A^T x \leq b \}$$

$$(D) \max \{ \langle b, y \rangle \mid y \geq 0, Ay \geq c \}$$

の双対性が得られます。

Tuckerの定理を知っていると、この辺のことについて「なんだ、たったそれだけのことか」と感じられるようになれます。



黒木玄 Gen Kuroki @genkuroki

on May 3

もちろん、こういう話に触れることができるような余裕は、授業時間内にはない。

mathtod.online powered by [Mastodon](#)